

編集・発行責任者；木下耕一 〒157-0066 東京都世田谷区成城 8-24-1 - A-201
Fax&Tel 03 - 3482 - 5257 / E-Mail ; kino-coh1@amy.hi-ho.ne.jp

『ずっとだいすき みんなで語ろうかたつむりさん』

『私たちは何でかたつむりのボラなのか』を語ったのが、この文集です。

基本的には、ボラや親達か、うんどう会に対するそれぞれ思いを自由に書き綴ったものですが、最初から最後まで読み通して見ると、「かたつむりの魅力」というか、多くのボラを惹きつけて止まなかったつむりの本質が、理解できくように思いました。

特に『みんなまとめて座談会』のコーナーで語られる、実行委員たちの発言には、かたつむりという枠を超えて、「ボランティアっていったい何なのだろうか？」あるいは、「仲間とボラの関係性」というような問題について、鋭い洞察を私に示してくれました。例えば、このうんどう会

を発案した小山さんは、自分とかたつむりとの関係を『ジャスト・ファンみたいな、それだけでいいんだ』と言い表しています。かたつむりのファンだから九年間も続いてきた。これってボラの在り方として、とても大切な事を私達に教えてくれているのではないのでしょうか？ 何かをして『あげる』のではなく、一人のファンとして共に歩むそこにボランティアの本質があるように思いました。私が、かたつむりの本格的なファンとなったのは、一九九二年二月手話サークルたんぼばで花田さんと仲間達をお招きした講演会の時からですから、うんどう会は、その一年半前にスタートし、大勢のボラ達の心を虜にしていた訳です。

それから「マニュアルどおりにできないのがかたつむりなんだ」という亜季さんの発言には、仲間とあくまでも対等に接すること、こだわりの仲間たちの早さで共に歩いてきた、かたつむりボラの心意気が感じられました。

他にも「何でこんなに時間を費やすんだろう」「つてくらい時間を費やして、その年に考えられる一番良い方法を見つけ出してやる」「いかに実行委員の内輪だけで終わらないか」など高松さん（昔、めぐる手話の会代表だったなあ）の発言にも、たいへん勉強させられました。

これから私がかたつむりと関わっていく上で教科書となりそうな文集です。（五百円・めざす会発行）

新聞スクラップ

01/14 読売

先天的聴覚障害者、脳聴覚領域で手話理解

生まれつき耳の不自由な人が手話を理解する際、話し言葉を聞き取る脳の聴覚領域で情報を処理していることが、大阪大学医学部耳鼻咽喉（いんこう）科学教室大学院生の西村洋さんらの研究でわかった。いわば手話を「聞いている」わけで、通常は視覚情報の処理には使われない領域を利用する脳の柔軟な仕組みが明らかになった。十四日発行の英科学誌「ネイチャー」に掲載された。

西村さんらは、先天的に耳が聞こえず幼児期に手話を学んだ五十歳の男性に「父」「川」「テレビ」などを意味する手話を見せ、陽電子放射断層撮影装置（PET）で脳の働きを調べた。その結果、大脳の両側部にある聴覚連合野と呼ばれる部分が活性化し、これに対し、手話をしていない人の姿を見せると、映像を処理する視覚連合野だけが反応した。

聴覚連合野は話し言葉を処理する領域とされ、けがなどで障害を起こすと耳で聞いた言葉は理解できなくなる。耳の聞こえる人が手話を覚えた場合や文字を見たときには視覚野だけが反応し、聴覚連合野は活性化しない。これらから、西村さんら幼いころから手話で会話している耳の聞こえない人の脳には、視覚野に入った手話の内容を聴覚連合野に送る新たな情報処理ルートができるとみている。